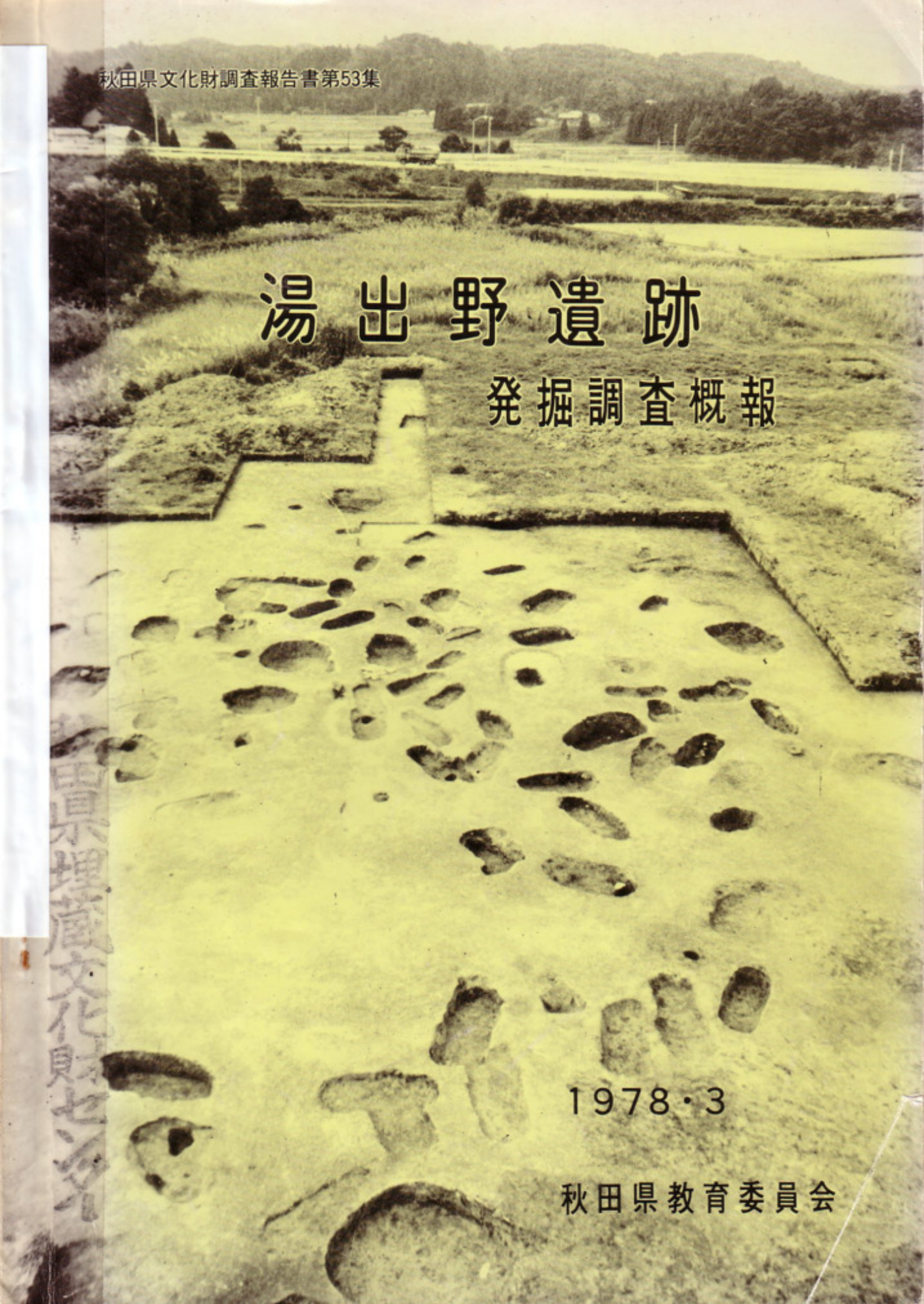
秋田県文化財調査報告書第53集



湯出野遺跡

発掘調査概報

1978・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

由利郡東由利町老方地区は県営ほ場整備地域に含まれ，昭和52年から工事を施行しておりました。しかし，同地域には周知の「湯出野遺跡」が所在し，ほ場整備により破壊されるおそれがあったため，県農地整備課と協議の上，事前発掘調査を実施することにしました。

調査の結果縄文時代後期末葉から晩期中葉までの多くの遺物とともに，103基におよぶ土壙墓群が発見されました。今，その結果を公にすることは，当地方の研究に貴重な資料を提供するものと考えます。

また，同遺跡の重要性から，東由利町では県農地整備課へ計画の一部変更を願い，遺跡を保存することにいたしましたが，このことは同地域の文化財保護に大きな示唆を与えるものと思われます。

最後になりましたが，調査ならびに概報作成にあたりご協力いただいた調査員，東由利町教育委員会，県農地整備課等の関係各位に，心から感謝の意を表する次第です。

昭和53年3月

秋田県教育委員会

教育長　畠山芳郎

目　　次

序
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の位置……3
Ⅲ　調査の方法と経過……4
Ⅳ　発見した遺構と遺物……7
　1，土坑墓群と出土遺物……7
　2，その他の出土遺物……19
Ⅴ　ま　と　め……35

例　　言

1　本報告は，秋田県由利郡東由利町老方字湯出野に所在する縄文時代晩期を中心とした遺跡の発掘調査概報である。

2　発掘調査は畠山憲司，大友俊和，柴田陽一郎が調査員となり行った。

3　本報告は次下のように分担して執筆し，畠山が編集した。

　目次のⅠ……富樫泰時

　Ⅱ，Ⅲ，Ⅳの1と2，Ⅴ……畠山憲司

　Ⅳの2……大友俊和

4　遺構及び出土遺物の写真撮影は畠山憲司が行った。報告書中の出土遺物の実測図，写真は全て½に縮尺した。全体図や遺構の縮尺は任意でありスケールを付した。方向は全て磁北である。

5　今回の発掘調査に際し，下記の機関および所属職員，各位の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

　秋田県農地整備課，由利農林事務所土地改良課，　東由利町役場，　東由利町教育委員会，東由利町公民館，秋田考古学協会員　小玉準，秋田県払田柵跡調査事務所

6　遺跡の航空写真は東由利町森林組合所有のものを複写したものである。記して感謝したい。

Ⅰ 調査に至る経過

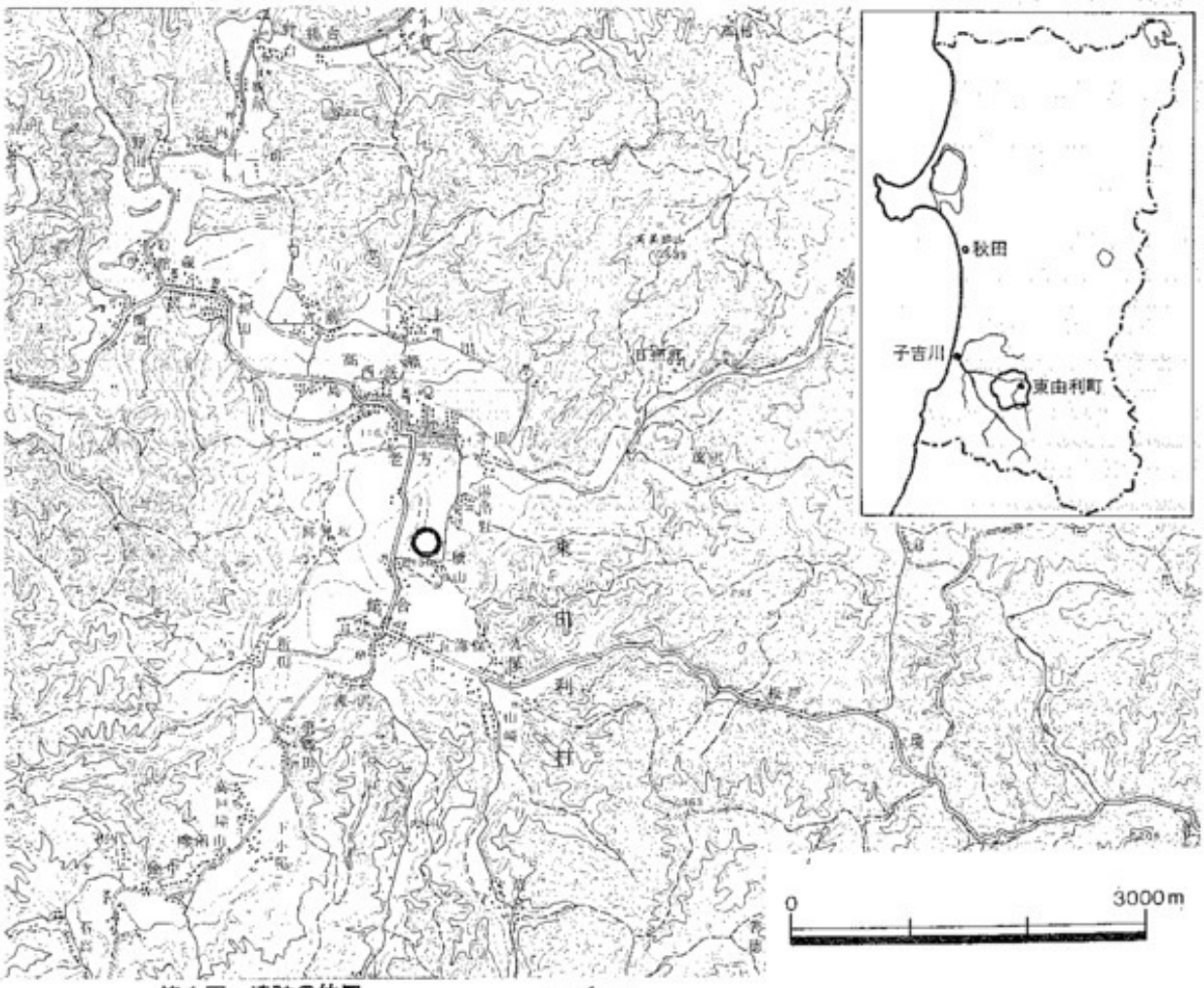
由利郡東由利町に所在する湯出野遺跡は昭和30年代に知られていた，いわゆる周知の遺跡である。この遺跡が昭和52年度の県営圃場整備事業東由利地区の計画区域内にあり，昭和52年2日8日，その処置について由利農林事務所から連絡があった。

そこで工事を進めるとすれば発掘調査が必要であること，法的手続きをとってもらう旨を話した。

昭和52年3月10日付け，由農一390で秋田県知事小畑勇二郎から文化庁長官へ通知が提出された。その結果同年5月27日付け，委保第5の805号で文化庁長官安嶋　彌から事前に発掘調査を実施するようにとの通知があった。

同年6月9日由利農林事務所から文化課へ現地調査依頼があり，6月20日文化課学芸主事富樫が現地を調査して発掘予定地域を推定し，発掘面積約1.400㎡とした。

その後，文化課で検討した結果，発掘調査は秋田県払田柵跡調査事務所の畠山憲司に担当を依頼し，8月8日発掘調査に着手したのである。



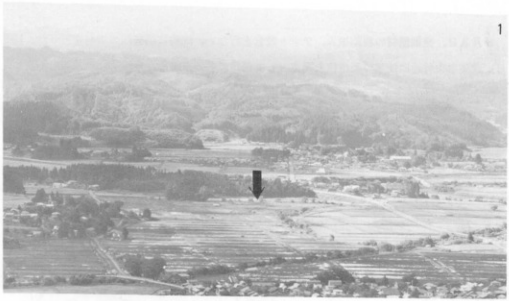
第1図　遺跡の位置

第2図　遺跡周辺の航空写真　　矢印先端が遺跡

Ⅱ 遺跡の位置

湯出野遺跡は秋田県由利郡東由利町老方字湯出野に所在する。東由利町は由利郡の中央東端部にあたり，秋田県の中央部から西南部に広がる出羽丘陵中にある山あいの町である。古くより由利海岸と横手盆地とを結ぶ中継点に位置し，現在国道107号線が町の中央を東西に横切っている。

この東由利町を南東から北西に貫流する高瀬川（石沢川の上流）の一支流である松沢川は，



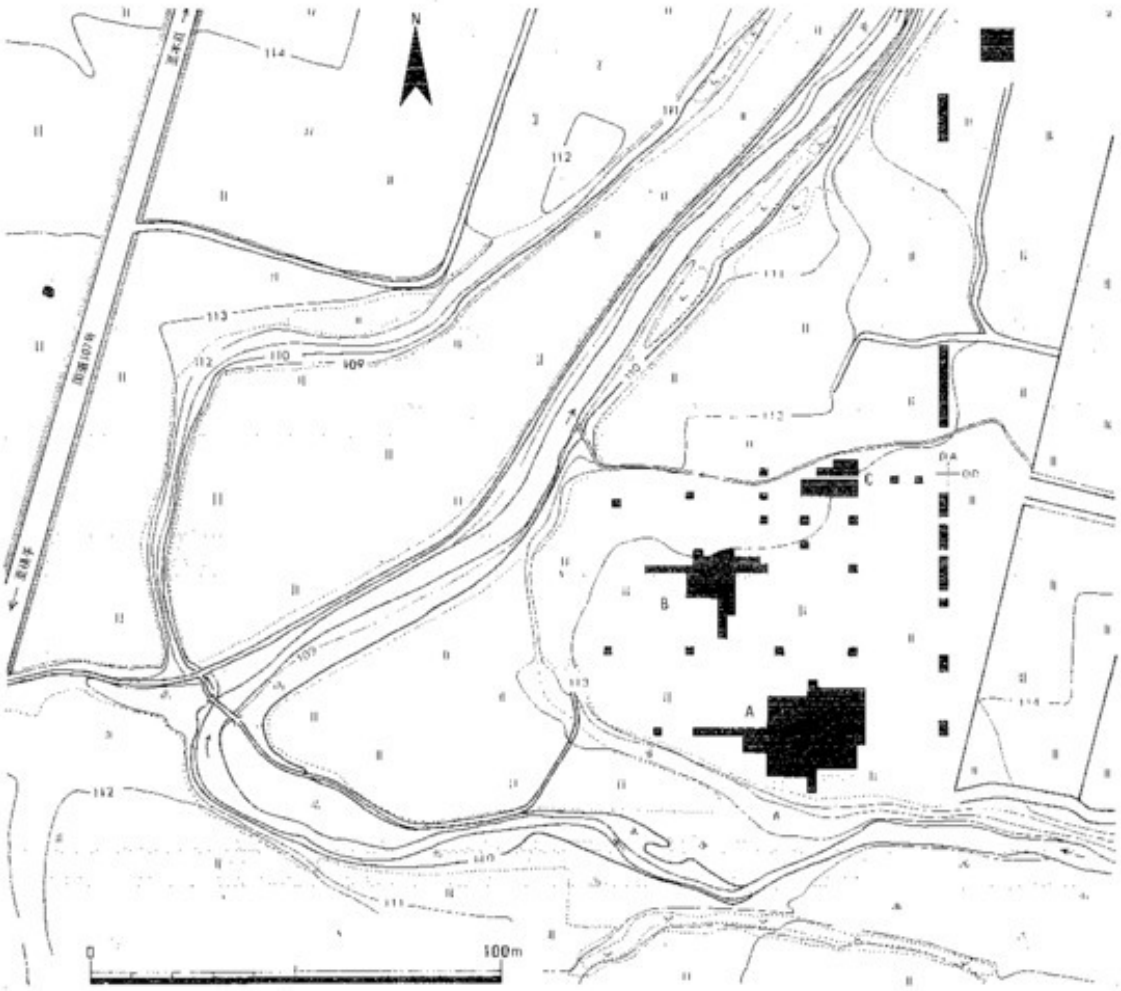
第3，4図　1遺跡遠景（北▶南）　2遺跡全景（南▶北）

老方の東方1.2kmにある横山部落から西に向かい，国道107号線の直前で急に流路を北にとる。このため，L字形に曲がったその内側は低平な河岸段丘面になっている。湯出野遺跡はこの屈曲部の東内側ふところに抱かれるように位置し，松沢川の形成した最低位段丘上である。川の水面との比高は3～4mを計る。

遺跡は現在水田で，現表土から1～2m下に段丘礫層があり，その上に砂質の黄褐色土がある。遺跡の中央付近は西側から泥炭層が黄褐色土にかわって入りこんでいる。土器及び石器等の遺物は水田面に広く分布し，その範囲は東西100m，南北200mにわたる。

Ⅲ 調査の方法と経過

8月8日，発掘器材の現地搬入，テント設営を行ない，同時に調査区の下刈を行った。同9日に遺跡中央付近に任意の基準杭を原点として任意の基北を求め，東西南北の基線を決定した。



第5図　調査区全体図

原点をＢＡ００とし，これから２ｍごとに東西にアルファベット（Ａ～Ｙの25文字）２文字の組み合せ，南北に２桁の整数の組み合せ（00～99）を用い，各グリッドの名称は南東隅の交点の文字と数字を用いた。つまり，南北は原点を00とし北に00，01……99，南に00，99……01で，東西は原点をBAとし，西にＢＡ，ＢＢ，……BY，CA……CY，……，東にBA，AY……AA……という具合である。遺跡全体の遺物の散布状況や土層を見るため，ＢＡラインに沿って発掘を開始した。８月11日までにＢＡラインに沿ったグリッド調査を終えたが，ＢＡ09，10付近で現地表下1.0～1.1ｍくらいで流れ込みと見られるような一群の遺物を得た他は特に遺構も，集中した遺物も検出できなかった。遺跡の北端部と思われたＡＴ52で圃場整備の排水路の壁面に径約1.5ｍ，深さ約0.9ｍの土坑が見られたので，この周辺を精査したが，他に遺構は全く見られなかった。土層は地点によってかなりの変化が見られ，遺跡の中央部には西から泥炭層が入り，北端はこれが見られず，表土下はすぐに地山黄褐色砂質土であり，その下は段丘礫層になっている

第６図　発掘状況

８月12日から遺物が集中していると見られるＢＬ98～01，ＢＮ98～01付近を掘り下げたが，土器，石器等が多量に出土した。この地点の耕土のすぐ下に遺物が大きな河原石を混じえて押しつぶされたように出土し，その下が軟かい黒褐色土となり，この中から完形に近い土器等が多く出る。またこの間遺物全体の散布の様子を調べるため00ラインより南側で，20ｍ四方毎に１グリッドの割で坪掘りを試みた。その結果ＢＱ68やＢＶ68から土壙が検出され，８月23日からこの広がりを確認する作業も並行して行った。（便宜的に図５のように遺物や遺構の集中した地区にそれぞれＡ，Ｂ，Ｃの名称を付した）Ａ地区南側では耕土が浅く，15～20㎝ですぐ砂質黄橙色の地山となり，地山まで全面を下げると黒色埋土の土壙が次々に確認できた。

土壙の平面形は長径1.2ｍ～1.5ｍ，短径0.6～1.2ｍの小判形のものが多く，径1.3ｍ前後の円形のものも見られ，中にはその中心に２～３個，10個前後の集石のあるものも見られ，この

第7図　発掘状況

他に埋甕もあることがわかった。A地区内の地山は北に向かい下降するようで，同地区内の北側では耕土と地山土の間に暗褐色土が存在し，その暗褐色土の中間で土壙を確認することができた。暗褐色土の中に地山黄橙色土が楕円形に堆積していたからである。しかし，そのレベルでは明確な輪郭が摑み得ないため，結果的には地山まで下げ土壙のプランを確認した。B地区では耕土の下は石器，土器片混じりの砂利層で，その下に押しつぶされたような遺物が多く見られた。この後，雨等の悪天候にさいなまれながらA，B，C地区の拡張と掘り下げを行なった。A地区では，これら土壙が墓壙であると判断し，慎重に埋土を掘り下げたところ，小玉や勾玉が出土し，埋土の水洗いでは耳栓様耳飾も見つかった。また，土壙全体の約$\frac{1}{3}$の土壙からはベニガラの散布が見られた。B地区は耕土の下に石器，土器片混じりの砂利層が一面に見られ，その下に土器が押しつぶされた形で多量に出土したが，特別な遺構等は見られなかった。B地区西端，南端では遺物の散在が切れることを確かめた。C地区では遺物包含層の厚さは約0.8 mにも達し，これ以上の拡張は困難であった。最下層からは後期最末葉か晩期の初めの土器が見られた。

9月26，27日，A地区の写真撮影を行ない，実測しきれなかったものや，B，C地区の精査は10月12日から10日間補足調査することにした。10月12日から20日までの8日間ではC地区の各層位ごとの掘り下げを長さ14 m，幅1 mにわたって行ない，墓壙群の精査も行なった。調査期間中，発掘調査のため工期のおくれていた圃場整備事業を03ラインより北側で認めたことは遺憾であったが，10月11日関係者協議の結果，墓壙群約2,400 ㎡は町で保存することとし，遺物の濃密な分布を示すB，C地区にしても工法を変更し，遺物包含層に影響の及ばないようにしたことは，緊急発掘調査中のこととしてはわずかの救いであった。10月21，22日の両日，墓壙群に川砂を入れて応急の保存をはかり，22日に調査器材その他を運搬して全ての調査を終えた。

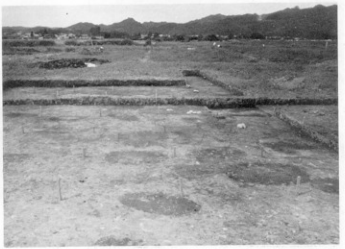
なお，期間中9月12日には現地で説明会を開き地元民をはじめ150名以上の参加を得，その他町内の小中学生全員に現地で状況を説明した。

Ⅳ 発見した遺構と遺物

遺跡の南端部で土壙墓群（A区）を，ほぼ中央部（B，C区）で多量の遺物を発見した。B，C区では住居跡の発見は出来なかったものの，土器等の出土状況などからして居住区ないしはそれに近似した地区であったことが想定でき，それから約50～80m南に墓域をおいたものと思われた。以下土壙墓，出土遺物の順で記述する。

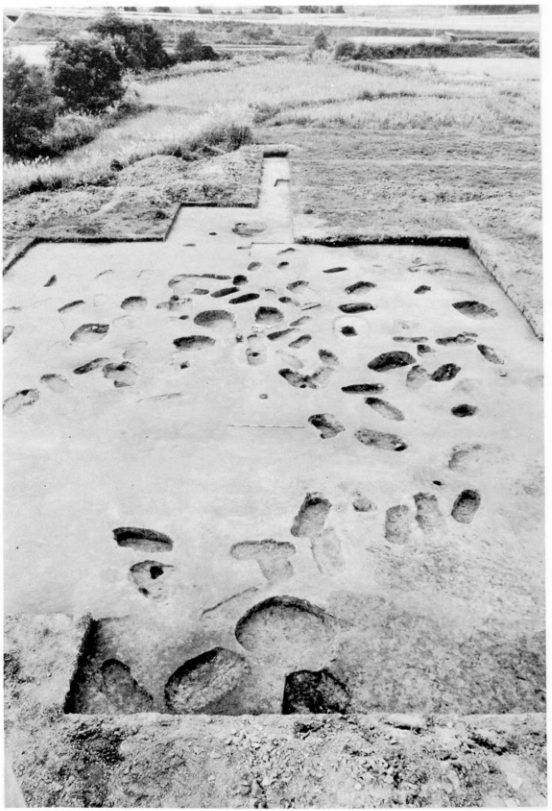
1 土壙墓群と出土遺物

A区全体で約550㎡を発掘し，土壙墓103基，埋設土器8基を確認した。土壙墓，埋設土器，ピットには発掘順に一連番号を付した。当初上面観察で土壙墓と思われるものにも番号を付したが，精査の結果，不明なものも数基あり，欠番になっている。以下土壙墓群の概略を述べ，代表的な土壙基7基について少し詳しく記することにする。

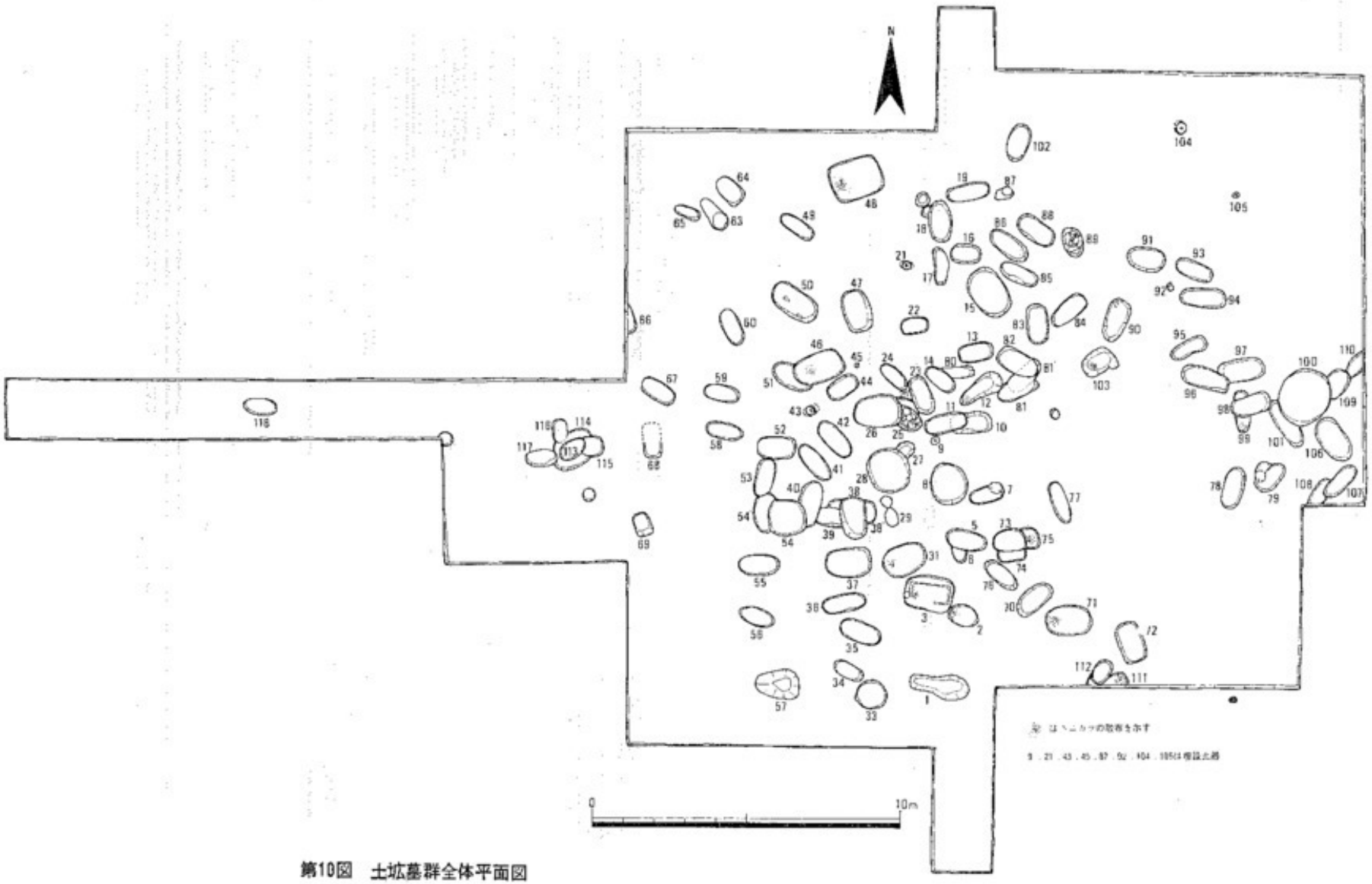


第8図 土壙墓群発見状況

土壙墓は調査区のほぼ中央部，およびその東，南東部に集中しており，全体に長軸を北西一南東にする楕円形の配置になっている。そして，楕円形の中心部約12m×6mほどには土壙墓はほとんどない。各土壙墓間にはかなりの切り合いが見られ25号と25'号と26号や，38号，38'号，39号などでは3個の互いの切り合いになっている。土壙墓は耕作土を除去するとすぐ確認できたものがほとんどであるが，とくにその南側では土壙墓の上部が，耕作等のため後世に失われてしまったものが大分あり構築当時の深さについては正確



第9図　土坑墓群全景



第10図　土坑墓群全体平面図

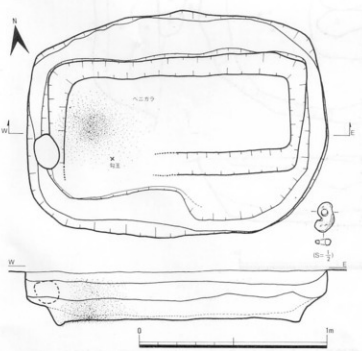
な数値を知り得ないものがほとんどである。土壙墓個々の平面形は長軸1.2m，短軸0.6m前後の小判形ないしは隅丸長方形のものが最も多いが，この他に円形のものや，やや不整楕円形のようなものもある。3，8，17，18，24，26，50，79，84，90，103号土壙墓などでは1～2個の人頭大の河原石を土壙の中央か，片方の端にのせるか，埋置するかしている。25号土壙墓では10数個の河原石を用いて，組み石状に設置していた。これらの土壙墓上の集石も浅いものは後世にとばされた可能性がある。土壙墓の埋土状況は底面ほど軟かい黒色土が入り，上に行く

第11図　土壙墓群部分（東▶西）

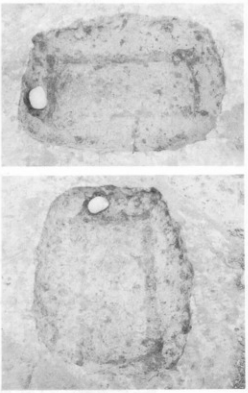
に従い地山土をブロックないしは粒状に含むようになり，その上面中央部近くに，最後に掘り上げたと思われる黄褐色砂質土の地山土をかさねている例が多く見られた。副葬品と思われる勾玉，小玉，耳飾等は計14基の土壙墓から出土しているが，土壙墓内の底面付近からのものがほとんどである。ベニガラが散布している土壙墓は11基である。埋設土器は調査区の中央から北側に見られたが，これも南側にもあってそれが耕作等によりとばされた可能性がある。土器を埋設するためのピットはあまり大きくなく，ほぼその土器の最大径前後と思われる。埋設土器8基のうち底部に穿孔のあるものは5基で他には倒立しているものが1基あった。

3号土壙墓

土壙墓群中央南側で表土（耕作土15㎝）下すぐに確認した。平面形は墳口部で1.6m×1.2mの隅丸長方形を呈し，壁は南辺の一部を除きほぼ垂直で，途中テラス状の段を形成するようにして墳底にいたる。西壁のテラス状段の上に，20㎝×10㎝の丸い河原石がある。墳底面には幅約10㎝，深さ5㎝前後の黒色土の落ち込みが1.3m×0.6mの長方形を呈し，その中の南西部から緑色の勾玉1個が出土した（第29図の1）。ベニガラが，遺構を確認したときから認められ，墳底面下の地山層にまでしみ込むくらい厚く，広く散布していた。現存する深さは約30㎝であるが，上部は後世の耕作等でかなり削平を受けたものと思われる。長軸方向はN81°Wである。



第12図　3号土壙墓

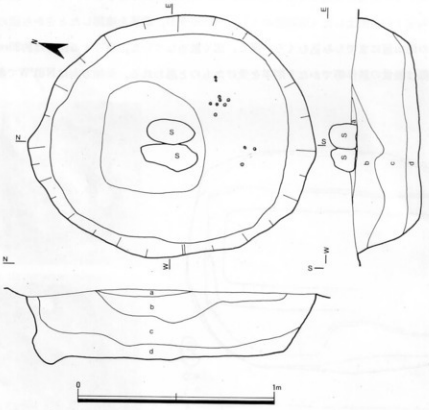


第13図　3号土壙墓　上（南▶北）　下（東▶西）

8号土坑墓

土壙墓群の中央部で表土下すぐに確認した。平面プランは径1.3～1.4mのほぼ円形。埋土上面の中央に25～30cmの大きな河原石2個を長径が南北になるように埋置している。埋土は上面ほどかたく，地山土であるにぶい黄橙色土の比率が多い。坑底面はそれほどすっきりした平坦面ではない。埋土上面から深さ30cm前後から坑底面にかけ28号，33号土坑出土の小玉と同じような小玉が約30個出土し，石鏃も1点出土している。

第14図　8号土坑墓（東▶西）

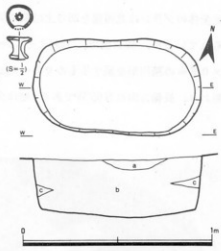


第15図　8号土坑墓

22号土坑墓

表土下の黒褐色土の中に，地山黄橙色土の2次堆積が見られたので，土坑墓の存在を知ったが，全体のプランの確認は地山面まで下げなければならなかった。平面形は0.9m×0.5mの隅

第16図　22号土壙墓　（南▶北）

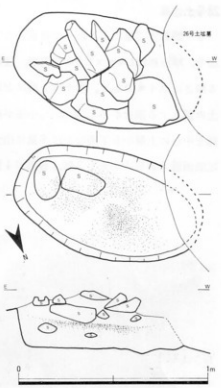


第17図　22号土壙墓

丸長方形を呈し，長軸方向はN81°W，壁はほぼ垂直で，壙底面は平らである。埋土は上面中央部に地山黄橙色土のレンズ状堆積がありかたく（第17図のａ），その下に軟かい黒褐色土を主体とするボソボソした土が入っていた（ｂ）。埋土の水洗い中に耳栓様耳飾を１個検出した。（第29図の６）

25号土壙墓

土壙墓群中央で，中心的な存在としてあるかのように発見された。壙中央からやや南東寄りに，大小13個の河原石を組み合わせ，一種の上部構造的な性格をにおわせている。この組み石の下には20㎝×30㎝のやや平らたい河原石を壙中央部におき，その上下，周辺にはベニガラが広く厚く散布



第18図　25号土壙墓

第19図　25号土壙墓　（１）

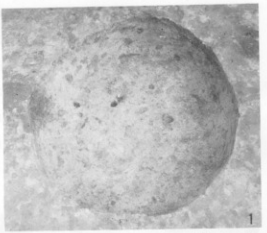
している。さらにこの下，坑底面南東隅には20cm×15cmの丸い河原石２個があった。坑全体のプランは北西部を26号土坑墓で切られているが，坑口部で，おおよそ1.0m×0.6mの楕円形を呈するものであったと思われ，長軸方向はN65°Wである。壁は全

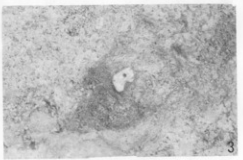
第19図　25号土坑墓２～４（東▶西）

体に垂直的で坑底面も平坦である。北側で25'土坑墓を切っている。副葬品の出土はなかった。

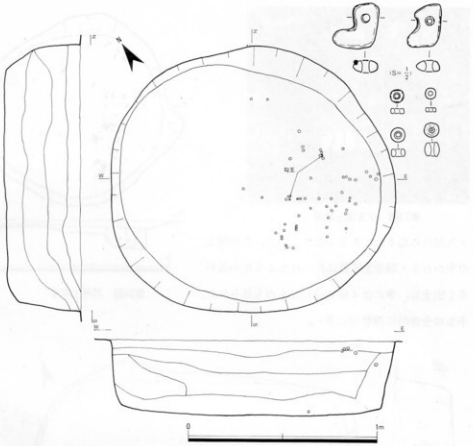
28号土坑墓

８・25号土坑墓に隣りあって発見された土坑で，平面形は1.4m×1.5mの円形，残存する深さは0.4mである。埋土は上層ほど地山土の混入する割合が多く，かたい。小玉が南東部を中心に上層から下層にかけ多量に出土し，坑底面近くからは勾玉も２個，石錘が１個出





第20図　28号土坑墓　　１，完掘状況，　２，断面，　３，勾玉出土状況

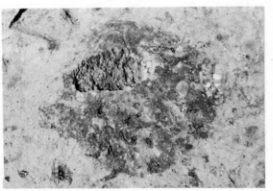


第21図　28号土壙墓

土した。壙底面は平坦であるが，径３～５㎝の小孔のようなものがいくつか見られ，その中からも小玉等が出土した。小玉は青白色の非常にもろいもので，取り上げる時に破損してしまったものも含めると計120個くらいに及ぶものと思われる。勾玉の材質はヒスイで，両側から穿孔している。（29図の４）

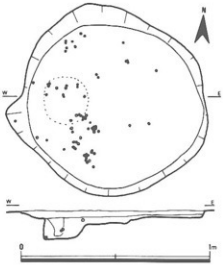
33号土壙墓

土壙墓群中最も南で発見されたもので，表土が浅く耕作によって土壙墓の上⅔以上削り取られてしまったものと思われる。現存するプランは径約1.0ｍの円形で，深さは７㎝，局部的に深いところでも15㎝しかない。埋土は暗褐色土に地山黄橙色土が粒子状に入ったものであるが，耕土の下にあ



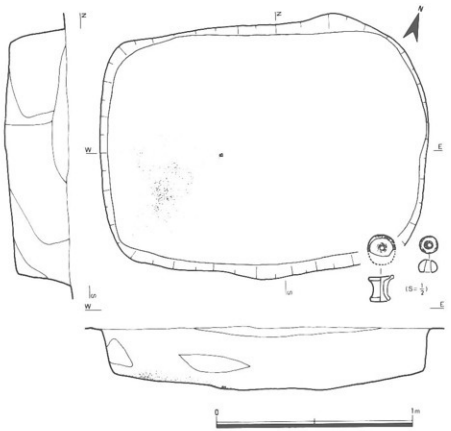
第22図33号土壙墓（南▶北）

第23図　小玉出土状況



第24図　33号土坑墓

ったけに踏まれてかたくなっていた。この埋土の中から8・28号土坑墓に見られたような小玉が多く出土し，中には4個連結したものも見られた。小玉は全体的に西半分に多い。



第25図　48号土坑墓

48号土坑墓

調査区中，最も北で発見した土坑墓で，22号土坑墓と同様に表土下の黒褐色土中に地山土の２次堆積があったが，確実な遺構の確認は地山面となったものである。平面形は約1.7ｍ×1.2ｍと土坑墓群中，最大級のもので現存する深さは0.3ｍ，長軸方向はN112°Wである。壁はほぼ垂直で底面は平坦である。底面の５cmくらい上から底面にかけベニガラの散布が西側部分に見られる。ベニガラ散布部分の東端底面から耳栓様耳飾が，水洗中に丸玉に近い淡緑色の小玉が出土した。（第29図の７）

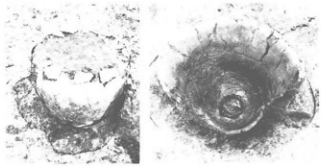
第26図　48号土坑墓

＜その他の土坑墓，埋設土器＞

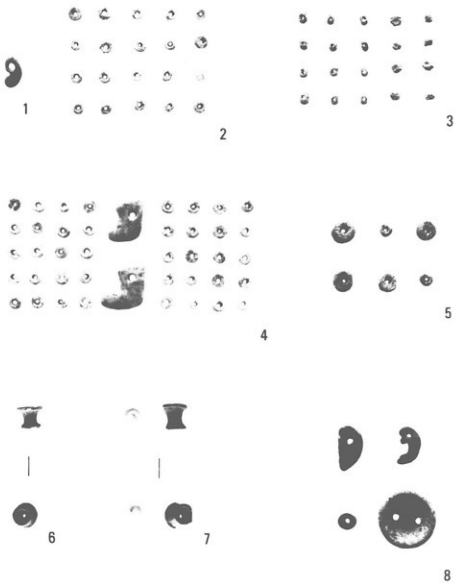
この他に112号土坑墓からは朱塗り石製小玉が約30個出土し，54′，96，100号土坑墓などからも28号，33号土坑墓出土の小玉に等しいものが出土している。土坑墓中からは土器の出土が少なく，若干あるものについても全く整理をすすめていないが，54号土坑墓中から出土のものについてだけ第27図にその拓影を示した。同一個体の破片であるが接合できない。晩期大洞Ａ式相当のものと思われる。54号土坑墓は40，54号土坑墓を切っており，この周辺では一番新しい土坑墓と考えられ，1.25ｍ×1.1ｍの隅丸方形に近い形を呈する。

埋設土器は表土下すぐに検出したが，大きな土坑を伴うものではなく単に土器を埋めるくらいのピットを掘り，その中に埋設しているようである。

第27図　54号土坑墓出土土器拓影



第28図　１，２　埋設土器（104号）



第29図　土坑墓内出土遺物　　B・C区出土遺物

1，3号土坑墓

2，33号

3，112号

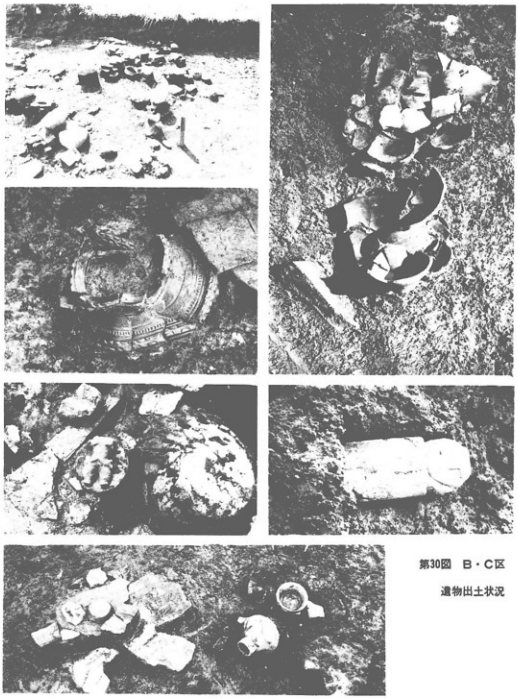
4，28号

5，54号

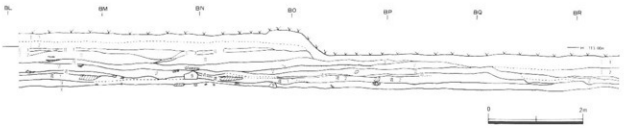
6，22号

2　その他の出土遺物

B・C区では特別な遺構は発見できなかったが，遺物の出土が多かった。整理はほとんど進んでいない状況にあるが，出土した主なもの，あるいは目についたものを以下に概略述べる。



第30図　B・C区
遺物出土状況

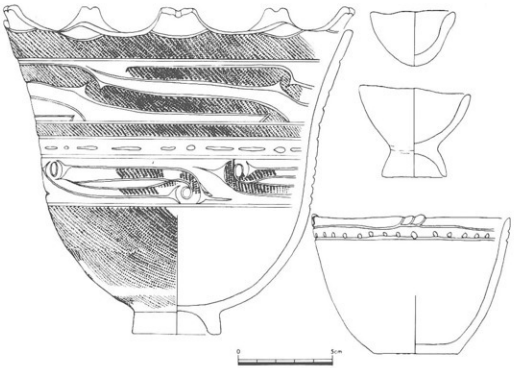


第31図　C区BL98～BR98土層断面図

最も遺物の多くしかも包含層の厚いC地区を層位的に調査したところ，地層はおおよそ10層にわけられた。地表面から約1.1 m前後の深さまでである。それ以下は遺物を含まないいわゆる地山といわれる地層である。遺物の含まれる地層は黒色を呈した土で，耕作土以外はほぼ，まんべんなく多量に包含されている。遺物の出土状況としては，多量の破片の他に潰れた状態で多数の個体が出土している。中には完形のものも含むがいずれも捨てられたという感が強い。層位による土器の様相を大まかにみてみると，最も下層からは後期の後半から晩期の初頭と思われる土器，中層部からは，いわゆる羊歯状文などのみられる晩期中葉頃の土器，中～上層部からは雲形文などの磨消縄文の多くみられる晩期も盛期からやや新しい様相の土器がそれぞれ出土している。

概要は以上のようであるが尨大な遺物を詳細に検討したものでは無いので，今後の整理検討によって詳しい資料が得られるものと思われる。

第32図　C区南壁（BL98～BR98）土層断面



第33図　その他の出土土器

土器

33図1（34図2）は口径17.6cm，器高18.5cmの台付深鉢形土器である。口縁は外側に開き頸部でややしまり胴の張る形をしている。口縁部には山形の小突起を有し，大きいものは先端が2分割されてい

2

1

第34図　出器土土（2）（S＝½）

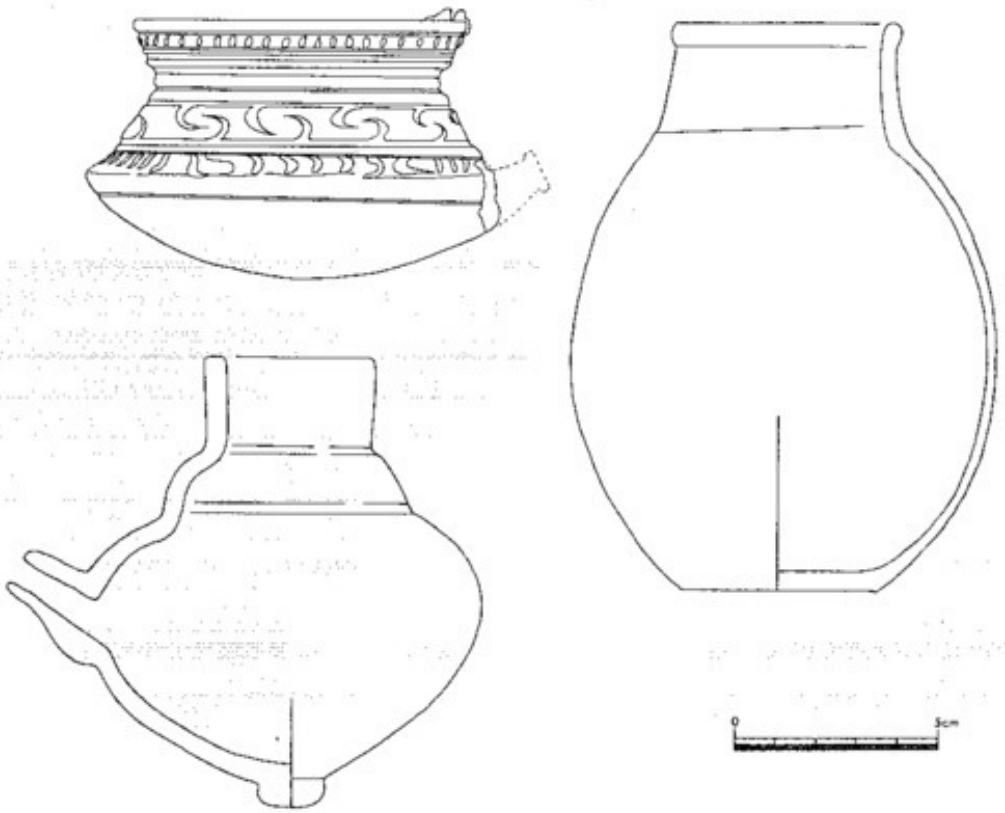
る。文様は上部から繩文の施された入組文，刺突文，三叉状入組文が施され胴部以下は斜繩文となっている。色調は灰褐色をしており胎土，焼成ともに良好である。

3は小形で実用とは思われない無文の台付鉢である。この種の小型のものは他にも数点出土している。

4（34図１）は口径10㎝，器高7.3㎝の小形の鉢形土器である。口縁部に２箇所２個１組の豆状の突起が付いている。口頸部は２本の沈線が施され，その間は棒状工具様のもので刺突文が施されている。外面は火熱を受けたためか赤褐色を呈し，内面は黒色の炭化物が付着している。

35図**1**（36図１）は晩期に特有の形をした注口土器である。口径8.2㎝，器高6.4㎝，最大径は胴部にあり，ゆるい丸底を呈した，いわゆるソロバン玉状をしている。黒褐色を呈し，焼成，胎土が良好で器面は磨かれ平行沈線や浮彫手法による入組文が施されている。この土器は注口部が欠損しているが一度アスファルトで補修した痕跡がある。

35図**2**（36図２）は黄褐色をした無文の注口土器である。口は垂直に立ち，頸部は２つの段を有する。胴部は丸くふくらみ，底部ですぼまる。底部には丸いつまみの突起がつけられている。また注口部のつけ根には２個のふくらみが表現されている。



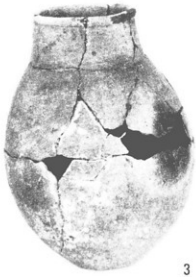
第35図　出土土器（３）

1

2

第36図　出土土器（4）（S=½）

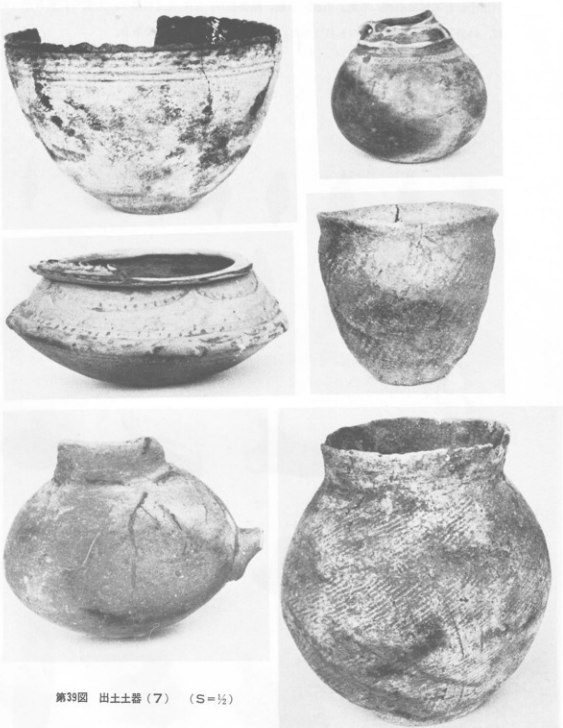
35図3（36図3）は口径 5.2cm、底径 4.9cm 器高14cmで胴部のふくらむ比較的小形の壺型土器である。色調は灰褐色を呈し、表面は磨いて仕上げてある。施文は無く口縁部と頸部に特徴を見るくらいである。



3

第37図
出土土器（5）
（S=½）

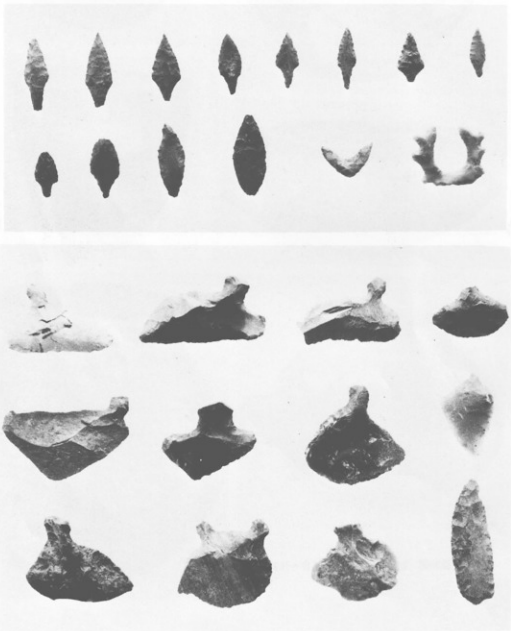
第38図　出土土器（6）　（S＝½）



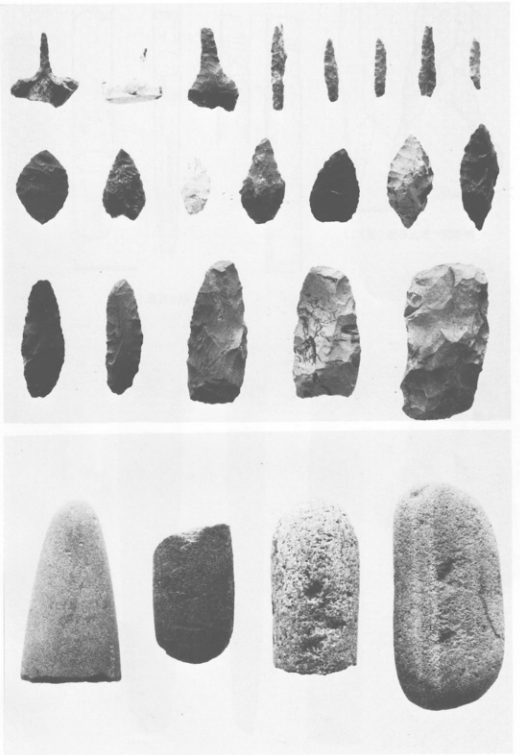
第39図　出土土器（7）　（S＝½）

石器

出土した石器は石鏃，石匙，石篦，石槍，磨製石斧，凹石などの他に，大型の打製石斧（第42，44図）10数点出土したのが目立った。第46図の3は異形石器である。



第40図　出土石器（1）　（S＝½）

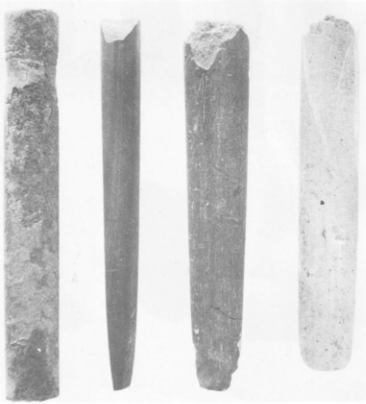


第41図　出土石器（2）　（S=⅓）

第42図　出土石器（3）

第43図　出土石器（4）

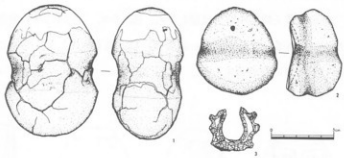
第44図
出土石器（5）（S=½）



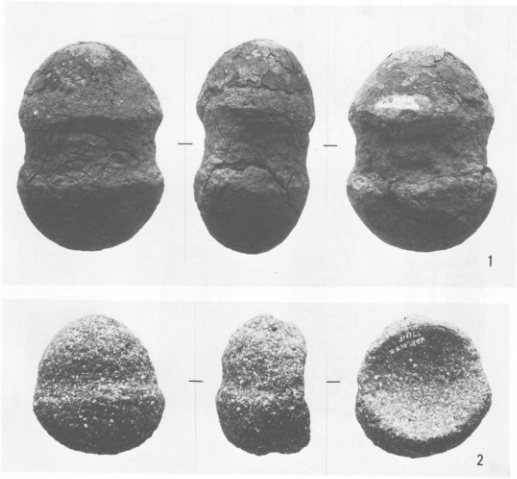
第45図　出土石器（6）（S=½）

石製品

実用に供しない石製品としては独鈷石（46，47図の１）や石冠（46，47図の２），石棒（43，45図）などがある。独鈷石の先端約冥には炭化物が付着し，あたかもスリコギの先のようにして使用された感じを与える。



第46図　出土石製品（１）

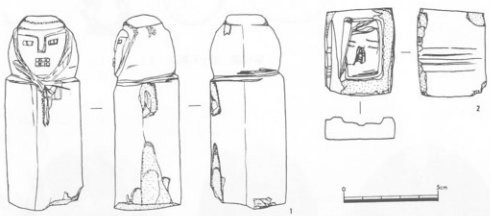


第47図　出土石製品（２）　（S＝½）

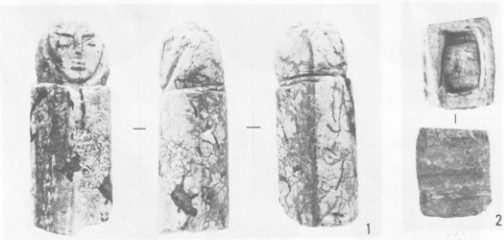
岩偶

48図の**1**（49図の１）は円筒状の泥岩と思われる岩石に彫刻刀様の器具で人面を陽刻している。直径４㎝，高さ9.7㎝で首の部分がくびれている。男根を模したものとも理解できる。表現は稚拙ながら細く瞳や歯までも表現している。

48図の**2**（49図の２）は縦4.5㎝，横3.6㎝，厚さ1.2㎝の岩版にレリーフ状に人面を陰刻したものである。きわめて細い線で髪，目，鼻を表現しているが口は判然としない。ていねいに磨いて四角に整形している。



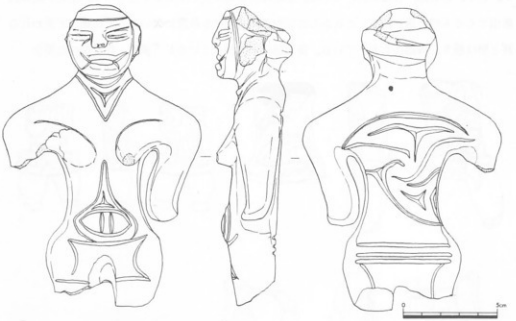
第48図　岩偶



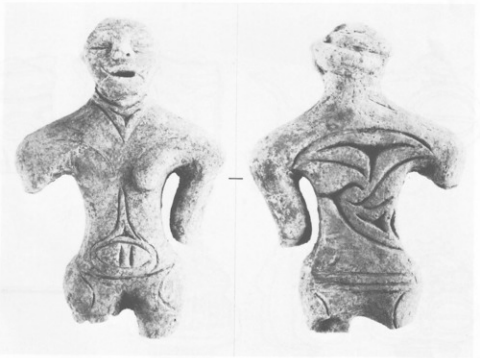
第49図　岩偶（S＝½）

土偶

50図（51図）は現存高15.8㎝，表現はかなり写実的で丸い顔に目，鼻，口が施され，開いた口の両脇には「ヒゲ」状に２本ずつの沈線が施されている。イレズミを表わしたものであろう

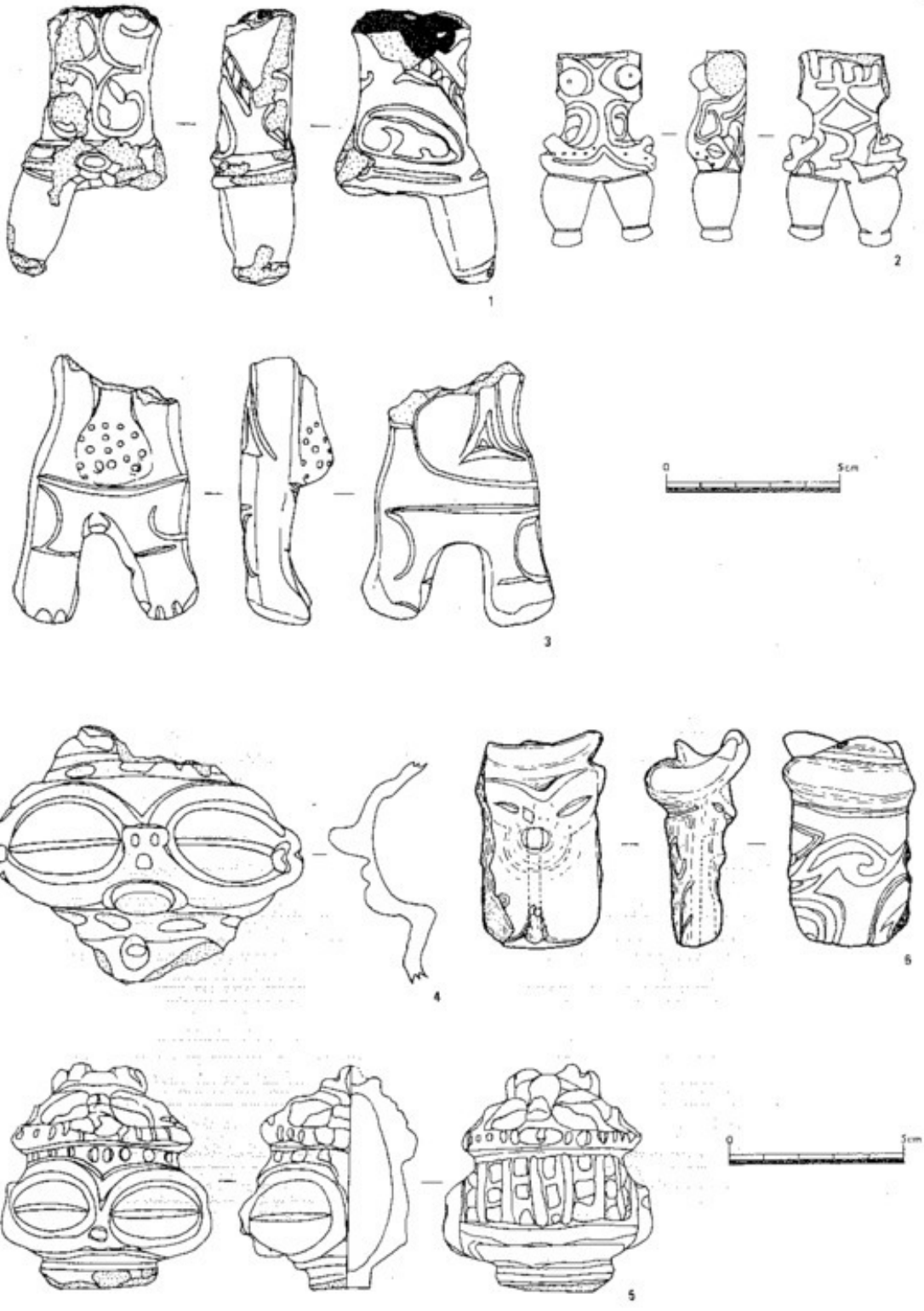


第50図　土偶　（1）



第51図　土偶（2）　（S＝½）

か。右手，右胸部，右足を欠いている。左足は調査時に欠いてしまったもので，整理が進み次第出てくるものと思われる。これから右側の各部分だけを故意に欠いたことは確実と思われる。肩と腰は張り，胸部はしまっている。後頭部には欠損しているが「渦巻」状に結った髪を



第52図　土偶（3）

表現していたと思われる。文様は沈線により，首の下と腹部に三叉状の陰刻文が，また背中から腰にかけても沈線による三叉状の入組文が施されている。後期末または晩期初頭のものと思われる。

52図**1**（53図１）は頭部と両腕，それに片足を欠いた土偶である。精製粘土を用い仕上げが良く磨かれている。一度欠損した部分を補修したらしく，頭部の欠けた部分に厚くアスファルトが付着している。胴部には浮彫手法で大洞Ｂ－Ｃ式頃のものと思われる文様が施文されている。

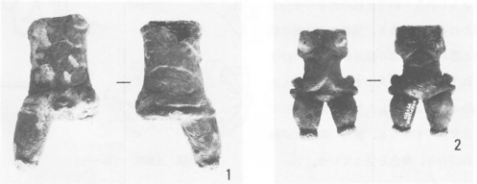
52図**2**（53図２）は高さ5.5㎝程度の小さい土偶である。頭部，両腕は欠損している。胎土，焼成とも良好で，ていねいに作られている。胴部には浮彫手法による渦巻様の文様が，また，胴部の隆帯には小さい刺突が施されている。

52図**3**（54図１）は土偶の下半部である。腹部の盛上がった部分に多数の刺突が施されている。「へソ」を表現したものであろうか。足の先端は刻目により３本の指に表現されている。表裏とも沈線による文様で背中の部分には三叉状の陰刻が施されている。50図のものと施文が似ている。ほぼ同時期と思われる。

52図**4**（54図２）はいわゆる遮光器土偶とよばれる顔面の破片である。遮光器状の大きな目，小さい鼻，口が表現されている。精製粘土を使った褐色を呈する焼成の良好なものである。器厚は４～５㎜とうすく，中空である。

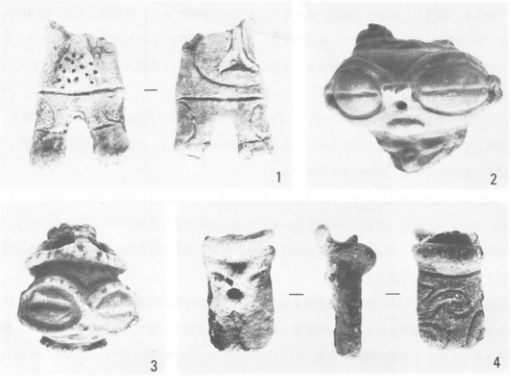
52図**5**（54図２）は中空の遮光器土偶の頭部である。頭部の突起は髪を表現したものであろうか。大きな目の上に眉と思われる部分は，刻目をつけて表現している。後頭部は浮き彫り手法で，大洞Ｂ－Ｃ式頃と思われる文様を施している。焼成も好い方である。

52図**6**（54図４）は正面頭部左側をわずかに欠く土偶である。手足の表現は省略されいてる。頭部は髪であろうか，他所に比べボリュームのある表現をるとっている。丸く大



第53図　土偶（４）　（S＝½）

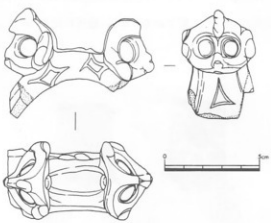
きく開けた口は，そのまま食道から下方へ穴となってつながっている。背面には渦巻様の沈線が描かれている。



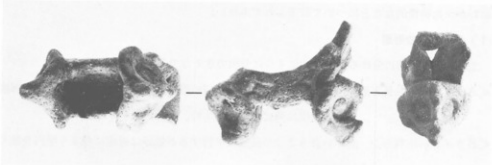
第54図　土偶（5）　（S＝½）

土製品

55，56図は土製品の範中に入るか，あるいは土器の範中に入れるべきものであるかもしれない釣手土器の釣手の部分と思われる破片である。橋状の釣手部に動物と思われる2個の獣面が外向きに付けられている。見る人によってはいろんな動物に見えるかもしれない。施文としては三叉状のすかしと，菱形の陰刻文が施されている。黒色を呈している。



第55図　土製品　（S＝½）



第56図　土製品（S＝½）

Ⅴ　ま　と　め

今回の湯出野遺跡の調査では遺跡の推定面積約20,000㎡のうち約1,200㎡を発掘調査した。その結果，遺跡のほぼ中央部には幅20ｍ，長さ約80ｍにわたって遺物が集中する地域があり，遺物の出土状況からして土器の捨て場的な様相が強いものの，居住区ないしはそれにごく近似した空間である可能性もあると見られた。この中で遺物の特に集中したＣ区では最大の厚さ0.8～1.0ｍの遺物包含層が見られ，縄文時代後期最末葉ないし晩期最初頭の土器から，晩期中葉，一部末葉に入るくらいの土器が出土した。土器，石器の他には土偶などの土製品，石冠などの石製品も多く見られた。

この地域から南へ50～80ｍの地域には東西35ｍ以上，南北20ｍ以上の墓域が存在し，約550㎡の中から103基の土坑と８基の埋設土器の存在が確かめられた。そしてこれら土坑群は以下のことにより土坑墓群であるとすることができる。

① 土坑は長辺1.2ｍ，短辺0.6ｍ，深さ0.3ｍの隅丸長方形ないし小判形のものが主体を占める。

② 土坑103基のうちベニガラ様赤色顔料の散布するものが11基あった。

③ 土坑103基のうち副葬品と思われる小玉，勾玉，耳栓様耳飾などを出土したものが15基あった。

④ 土坑間にはかなりの切り合いが見られ，全てが一時的に計画的に造られたものではなく，長期間地域を変えずに造られ続けたと考えられる。

⑤ 土坑の埋土の状況から自然に埋まったものではなく，いっきに埋めたものと思われる。

⑥ 他の遺跡の例では同じような土坑から人骨を出土し，土坑墓に間違いないとされている。

これら土坑墓および埋設土器については，ほとんど整理，検討を行っていないが，これまで

にわかった特徴的なことについて若干ふれてみたい。

1） 土壙墓の形態

土壙墓を形態的に分けると基本的に4つに分類できそうである。

＜Aタイプ…隅丸長方形＞ 向かい合うそれぞれの辺が直線的で平行。長辺と短辺がほぼ直交するが隅は角ばらず丸いもの。

＜Bタイプ…小判形＞ 向かい合う2つの長辺は平行するが短辺は両端にゆるく半円を描くようにふくらむもの。

＜Cタイプ…円形＞ ほぼ円を呈するもの。

＜Dタイプ…楕円形＞ 向かい合う辺がゆるく外側にふくらみ，角度を全く持たないもの。

＜Eタイプ…変形＞ 洋ナシ形であったりして全体としての形がA～Dに入らないもの。

これらA～Eタイプの出現頻度（土壙墓数）は次のような比率を持っている。

A：B：C：D：E＝40：42：4：5：4 （確実なもの95基を分類した。）

さらにこれを近似した形であるAとB，Dを合わせ明らかに異なるCタイプと比べると 87：4 となる。つまり湯出野遺跡の土壙墓の基本的な形としては隅丸長方形ないしは小判形であり，約4％が円形のものであるということになる。この円形を呈する土壙墓の持つ意味は不明であるが，円形土壙墓8，28，33，100号ともに小玉や勾玉の副葬品を出土していることは多いに注目される。

2） 土壙墓群の分布と構造について

土壙墓群の全体的な分布の状況は，中心部からかなり離れた土壙墓も存在するが，長軸方向を北西一南東にとる楕円形ないし小判形の配置をとるように観取される。その個々の構造についてはここでは触れないが特徴的なこととして次のようなことがある。

① 上部構造として組み石ないし1～3個の半頭大の河原石を壙口部にのせるものがある。

② 埋土中で長軸のどちらかの側に1～2個の河原石をおくものがある。

③ 壙底面に溝状遺構，ピットなどを持つものが若干ある。

3） 副葬遺物の存在する方向について

各土壙墓の長軸方向の明確な集中は現在までのところ認めることはできない。しかし，この中にあって副葬遺物やベニガラの散布等により，小数のものについてはその埋葬頭位の推定が可能である。

≪ベニガラ様赤色顔料の散布位置≫

ベニガラ様赤色顔料を被葬者の頭部あるいは胸部などの上半身に散布したものと考えると以下のようになる。

東位置のもの—25，75，111号

西位置のもの—2，3，12，31，46，48，71号

南位置のもの—99号

≪小玉類の出土（北西，南西は西，南東，北東は東とした）≫

西位置のもの—3，33，39，48，79号

東位置のもの—76，96号

南位置のもの—8，28，54′，112号

北位置のもの—89，90号

土坑墓内におけるベニガラ様赤色顔料の散布位置と玉類の出土位置からする推定埋葬頭位は東—5（24%），西—10（48%），南—4（19%）北—2（9%）である。

4　土坑墓群の年代について

土坑墓埋土中からの土器の出土がきわめて少なく，また仮にあったとしても年代比定の困難なものであったりしてまだ年代を決定づける資料に乏しいが，その終末期については54号土坑墓出土の土器片で推定し得る。54号土坑墓は40，54′号土坑墓を切っており，この周辺では一番新しいものと考えて差しつかえない。中からは第27図に示したように明らかに晩期大洞A式相当のものと思われる土器片を得ている。従ってB，C区の土器が後期最末葉から晩期中葉を中心とするということを合わせて考えるならば，湯出野遺跡の土坑墓群の造られた年代は晩期初頭から晩期末葉に入る大洞A式ごろまでとすることに，さしたるあやまりはないように思われる。

以上湯出野遺跡発掘調査の結果を概観したが，遺構や遺物への検討はほとんど進んでいない状況にある。今後，さらに検討を加えるつもりである。

参考文献

(1) 野村，森田，平川，中田　「札刈」　北海道開拓記念館　1976

(2) 野村，平川等　「札刈遺跡」　木古内町教育委員会　1971

(3) 芹沢長介　「石器時代の日本」　築地書館　1960